

志 谷 奥 遺 跡

銅鐸・銅劍出土地

昭和 51 年 3 月

島根県鹿島町教育委員会

志 谷 奥 遺 跡

銅 鐸・銅 剣 出 土 地

昭 和 5 1 年 3 月

島根県鹿島町教育委員会

はじめに

この報告書は、鹿島町が国庫補助事業として昭和50年度に実施した銅鐸・銅劍出土の志谷奥遺跡緊急調査の記録であります。

鹿島町には、著名な遺跡として知られる史跡佐太講武貝塚や古浦砂丘遺跡がありますが、新しく志谷奥遺跡という貴重な遺跡が発見されたことは喜こぼしいことであります。そして、今回の調査によって埋納壙が検出されたことは大きな成果がありました。

この小冊子がこの方面における資料としていさかでも活用されれば幸いです。

なお、本書を刊行するにあたり、ご指導を賜わりました奈良国立文化財研究所をはじめ調査にたずさわっていただいた方々に対して謝意を表する次第であります。

昭和51年3月

八東郡鹿島町教育委員会教育長

古瀬美延

目 次

I 遺跡の位置とその環境	(1)
1 遺 跡 の 位 置	(1)
2 周辺の主な遺跡	(2)
II 遺跡の発見と調査の経過	(4)
1 発 見 の 契 機	(4)
2 発見時の状況	(4)
3 調 査 の 経 過	(5)
III 遺構と遺物	(6)
1 調査地区の設定と埋納墳	(6)
2 銅 鐸	(10)
3 銅 剣	(17)
IV ま と め	(22)
V 埋納墳の保存化学処理	(28)

例 言

- 1 本書は、鹿島町が昭和50年度国庫および県費補助金を得て実施した志谷奥遺跡緊急調査の報告書である。
- 2 この調査は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの指導を得て実施した。
- 3 この報告書は、佐原真、近藤喬一両氏の助言を得て、山本清先生、前島己基と協議しながら勝部昭がまとめた。なお、稿をまとめるにあたって三木文雄博士、町田卓の各氏からは有益な教示を得た。
- 4 掲載図面は、勝部昭の製図にかかり、写真は、前島己基、井上嘉弘、三宅博士、勝部昭の撮影になるものである。
- 5 発掘調査で検出した 埋納墳は、化学処理したうえで保存したので、沢田正昭氏の手を煩らわし、この概要をあわせて載せた。

調査関係者

- ・ 調 査 者 鹿島町教育委員会教育長 古瀬美延
- ・ 調 査 指 導 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、飛鳥資料館学芸室長 佐原真
- ・ 調 査 担 当 者 島根大学名誉教授 山本清
- ・ 調 査 員 平安博物館助教授 近藤喬一 県文化課主事 前島己基 勝部昭 鹿島町教育委員会係長 中島毅
- ・ 調 査 补 助 員 奈良大学学生 桑誠子
- ・ 調 査 協 力 者 安達茂幸 安達優 池田潤雄 名越勉 野田久男 関崎雄二郎 秀坂真樹
蓮岡法障 横山純夫 松本岩雄 三宅博士

I 遺跡の位置とその環境

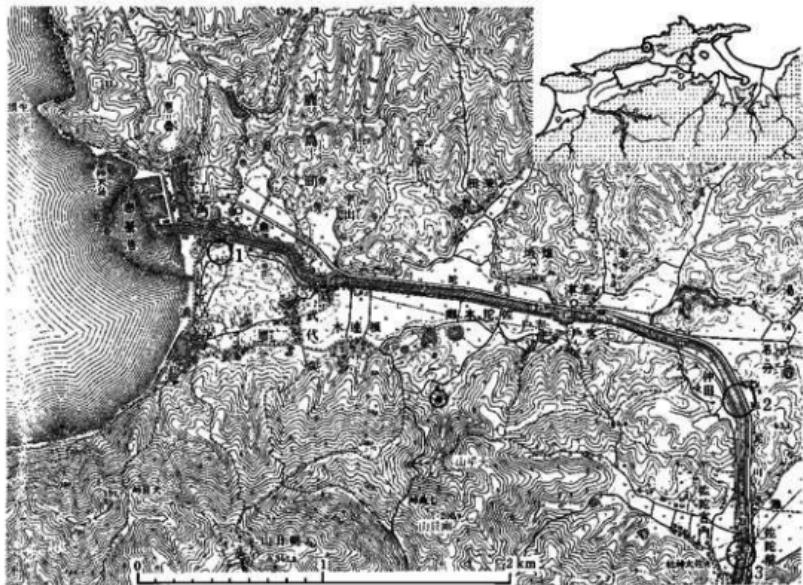


図1 志谷奥遺跡と付近の主な遺跡 (◎志谷奥遺跡 1古砂丘遺跡 2佐太溝武日塚 3佐太前遺跡)

1 遺 跡 の 位 置

島根半島の日本海岸側に志谷港がある。ここから佐陀川運河を東へ2.2km進上した地点から南方に600mいったところに狭隘な谷がある。この谷の中ほど、西側に朝日山から東北に派生した標高48.5m庄1の小支丘があるが、この東向き斜面標高35.5mの場所がいうところの銅鐸・銅劍の発見場所である。(後掲図版1の中央小屋の右上方電柱付近印の場所)

所にする地籍は島根県八束郡鹿島町大字佐陀木郷字志谷奥2338番地で、佐陀本郷安達茂幸氏所有の牧場地内である。谷のうちふところに築かれた安達茂幸氏宅から小丘上に作られた畜舎に通う道を90mほど登った路肩下側斜面1mのところに位置する。幅24m~40mの谷底平地面からの比高は13.5mである。

地元の人たちはこの谷を須谷と呼んでいるが、小字名の「志谷奥」は、谷口あたりを須賀口、須賀野などと呼ぶのと関連した一連の名であろう。

いま、銅鐸・銅劍発見場所から谷奥の正面を望むと美しい山容の

幽貝山が、また谷を隔てた東南方にもまろやかな大平山（2つの山はいずれも朝日山の支丘）が見える。谷底には幅2～3mの小川があり、この地域では稀れに見る豊かな水が流れる。付近のほかの谷に密集して立ちならぶ集落とは対照的に、ここには人家が3軒点在する程度で本来静寂、清澄な場所である。

また、谷口前面には、低湿な水田が開けるが、『出雲國風土記』は当時の状況を秋鹿郡の条で、

恵曇陵 本字惠伴改 惠曇字奏。周六里、有鶴鳩、兔、鴨、鮎、四邊生葦、蔥、昔。自養老元年以往、荷葉自然叢生太多、二年以降自然至失。

都無莖。俗人云、其底胸器、鰐、鱈等類多有也。自古時々人溺死。不知深浅矣。

と記載している。

2 周辺の主な遺跡

志谷奥遺跡周辺の主な遺跡としては、縄文時代の佐太講武貝塚、弥生時代の古浦砂丘遺跡、佐太前遺跡などが知られる（図1参照）。

佐太講武貝塚^{注2}は、鹿島中学校付近の佐陀川の両岸約100mの範囲に広がる山陰地方の代表的な貝塚で、国指定史跡となっている。縄文時代早期末から中期にわたる遺跡で、石器、土器、骨角器、貝類、獸骨、椎ノ実等が採集されている。土器は、条痕文・無文・爪形文・繩文・撚糸斜格子文などの文様をもつ。骨角器には牙玉・尖頭器、獸骨には、猪・鹿・猿などがある。

古浦砂丘遺跡は、佐陀川河口の左岸にある砂丘に埋れた弥生時代前期から古墳時代、奈良時代頃にいたるまでの複合遺跡である。金闇丈夫博士らの手による昭和36年冬、37年夏、38年夏の3次にわたる発掘調査^{注3}によって、特に弥生時代前期～中期初の埋葬墓の実態が明らかとなっている。注目すべきことは、埋葬人骨の中に額から側頭部にかけて帯状の陥入があり前額から左眼上線にかけて青緑色の着色が認められる男性骨の発見されていることで、金闇博士はこれを生前長期間にわたって額に銅製の装飾をつけていたものと見、それを呪師と想定されている。^{注4}このような人骨の発見は4体におよんでいる。さらに、鹿の中足骨を縦割りにし、灼骨した卜骨も発見されている。これらは弥生時代前期に比定されている。

佐太前遺跡^{注5}は、佐太神社前から佐陀川両岸あたりの水田一帯にひろがる弥生時代前期から後期にかけての集落跡と推測される。

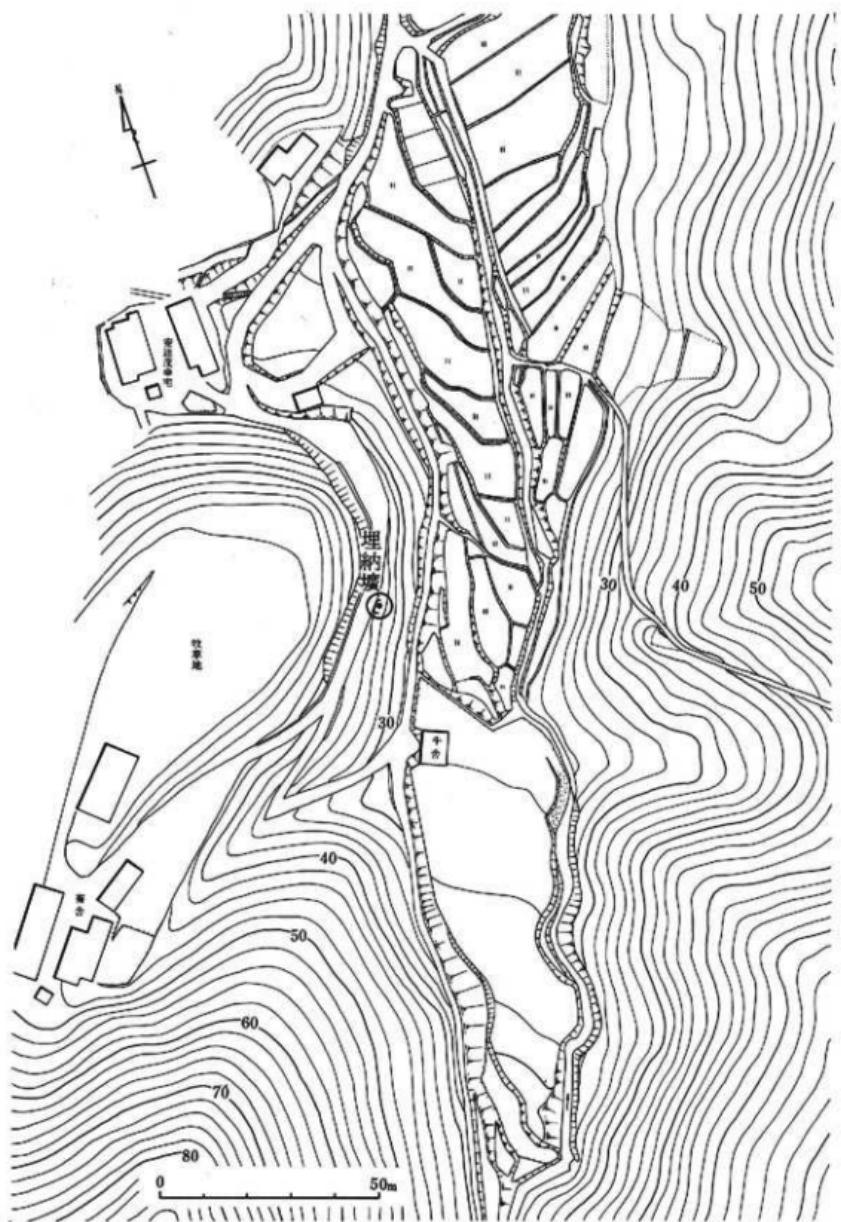


図2 志谷古遺跡付近地形測量図

Ⅱ 遺跡の発見と 調査の経過

1 発見の契機

考古学関係者が鹿島町で銅鐸・銅劍の発見があったことを知ったのは昭和49年8月12日のことである。すなわち、この日鹿島町の安達優氏が、県立図書館で催された「古代の出雲について」の講演会場に1枚のカラー写真を持ち込み、山陰中央新報社長野忠氏に示された。それが、たまたま居合わせた県埋蔵文化財調査員東森市良氏の目にとまり、銅鐸・銅劍らしいことを指摘された。

早速翌日、確認のため前記の長野・東森両氏に加えて県埋蔵文化財調査員池田満雄・県文化課勝部昭・鹿島町教育委員会中島毅各氏が安達優氏を訪れ、遺物を実見するとともに発見当時の事情を聞いた。その結果、銅鐸2個・銅劍6口を確認するとともに発見者は同じ町内の安達茂幸氏であることがわかった。そこで同氏の案内でお出土地を訪れ、掘り出した時の状況について話を聞いた。

その話によると、実際に銅鐸・銅劍が土中から発見されたのは、すでにこれより10ヵ月程前の昭和48年10月10日である。この日、安達茂幸氏が、畜舎に通ずる山道の路肩下側斜面に植えた柿ノ木に施肥するために穴を掘ったところ、偶然にも銅鐸・銅劍に突きあたりこれを引っぱり出した。同氏は、これが学術上貴重であることとは知らずにかの参考にでもなければと考え、鹿島中学校に持ちこまれた。しかし、このことは一般には報道されずまた安達優氏がこの事実を聞いて昭和49年7月に銅鐸・銅劍を一括自宅に預かり写真を写し、前述の講演会場に持ちこまれたというわけである。

安達茂幸氏の説明によれば、掘り出した時の状況は概略次のとおりである。

柿ノ木に施肥するため道路路肩に身体が道路に面するように立ち両手ツルハシで、直径70cmほどの穴を掘り始めた。するとまもなくガチッという金属音がした。見ると青銹びた刀劍状のものがあり無造作にツルハシで引っぱり出した。一つを掘りだすとまた見つかるという具合で、次々と合計6口を見つけた。1口は鋒を欠損していた。これが銅劍である。鋒がどの方向を向いていたのか、またその重なり具合はどうか、6口の銅劍の発見順はどうかなどは発見日から口数が経っており安達氏の記憶外である。そして、さらに少し掘り進むとまた金属音がしたので掘りあげると大きい銅鐸が、次いで小さい銅鐸が横になったような状態で出てきた。2つの銅鐸は入れ子の状態ではなかったという。



図3 発見状況聴取



図4 遺跡調査風景

発見後しばらくの間は、銅鐸・銅劍とも土が付着し、かつ強引な掘り出しによる損傷をうけていた。特にそれぞれの銅劍は屈曲がかなりあったけれども安達優氏が預られた時点で水洗いをして土を落とし、木槌で叩いていくらか曲げを伸ばしている。

なお、発見地点のすぐ上側を通る約3m幅の道は7年前に安達茂幸氏宅から畜舎に通ずる私道として新設されたものであるが、銅鐸・銅劍発見地点から1.5m離れた現在道路となっている場所に直径3m、高さ1.5m余りの岩塊2個が積重なったような状態で存在していたという。ただ、この岩塊は道路工事を施行するまでは埋れており目立たなかったという。今日では工事の時に爆破されてなくなっている。その破片の一部は安達氏宅地の庭にある池の緑石として使われている。

3 調査の経過

昭和49年8月13日付けで、安達茂幸氏から発見届のあった銅鐸・銅劍は現物が提出され、県教育委員会で保管されていたが、昭和50年3月国保有文化財となった。現在県立八雲立つ風土記の丘資料館で展示され、一般に公開されている。

一方、出土地については、その地形が急傾斜地に位置し、発見された穴の直下近くが崖となっている状況から、考古学関係者はいつ崩壊するともわからない事態を憂慮して緊急に調査をする必要を説かれた。

そこで、急ぎ鹿島町では国および県の補助金を得て総経費1,000千円で出土地の調査を実施することになった。

調査の主な内容は、出土地付近の $\frac{1}{500}$ 地形測量図作成（業者委託）と遺構調査である。

昭和50年11月17日、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターにおいて調査の打合せを行い、11月20日から26日までの1週間、島根大学名誉教授山本清氏を担当者として現地調査を実施した。期間中、23日に初雪があったほかは、この地方では珍しく好天に恵まれた。23日、24日は連休であったため多くの方々から暖かい協力があった。

なお、幸いにも調査によって埋納塙が検出されたため、調査関係者はその保存を望んだ。そこで、保存化学処理したうえで遺構を切り取って室内に保存することとなり、翌月の下旬1週間を費してその作業を行った。

III 遺構と遺物

1 調査地区の設定と埋納場 納場

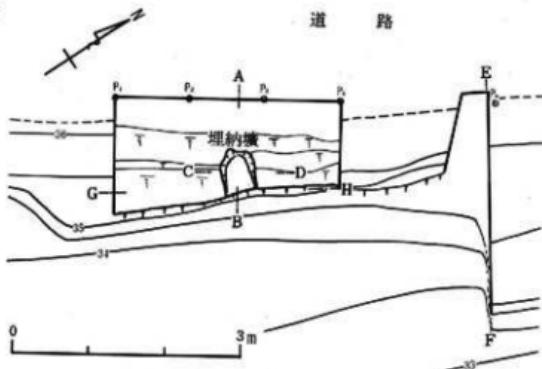


図5 調査地区図

調査地区の設定

偶然にも安達茂幸氏が銅鐸・銅剣を発見された場所は、発掘調査実施前では径70cmぐらいのわずかの凹みがあって、すぐその地点を把握できる状況におかれていた。

発掘調査の計画にあたっては、この発見地点のほかにも銅鐸あるいは銅剣が埋納されている可能性があるということからプロトン磁力計や地雷探知機による反応をみて立案する考えであったが、今回は見送ることとなった。

銅鐸・銅剣出土地を含む付近の地形は、道路造成の時原形を損つており、本来急傾斜をもつ地形がさらに急な崖となっている。このため出土地の下方に土壌を積んで崩壊防止用の防護柵をつくったうえでトレンチを設ければならないほどであった。

トレンチは図5のように路肩から下方側へ出土地をおおよその中心として崖面の横断方向に5m(1m間隔にP₁P₂…P₆とする)、縦断に1.5mを設定した。発掘したのはこのうちで3m(P₁からP₄の間)×1.5m=4.5m²である。これに加えて地層断面の状況を把握するため旧地形をよく残している部分(図5 E F付近)において縦断方向に溝を掘った。発掘調査面積としては小範囲である。

実際にはこの調査対象地のそばにあったといわれる大岩の片鱗をみいだしたかったが諸般の事情で確認できなかった。

層位 発掘結果によれば、地層の層序は次のようなである。表面は道路を

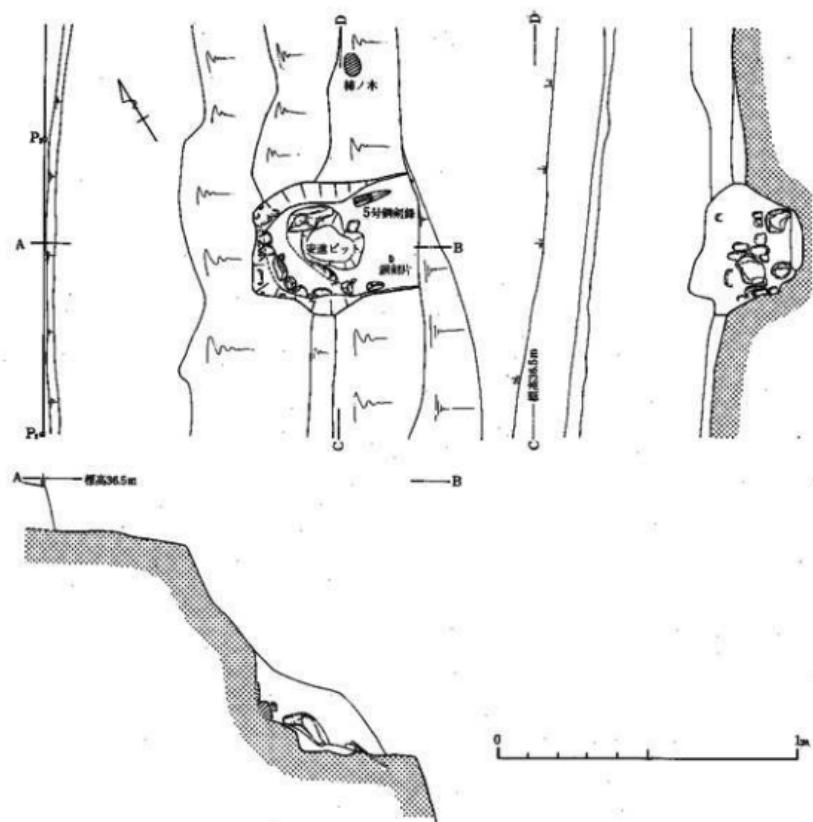


図6 埋 納 墓 実 測 図

つけた時ブルドーザーの押した小角礫を含む堆土が厚さ15cm～80cmある。その下層には薄い黒色をした旧表土が厚さ7cmある。さらにこの下層には、小角礫あるいは栗石大の岩石を含む黄褐色で、やや粘質土の地山がある。このような地層の状況をよく示しているのが図7である。

なお、発掘地の下方斜面には岩盤の露頭がみられる。

埋 納 墓

埋納塚は、小支丘の標高35.5mから35.9mの位置に掘られている。しかし、次のような2回の事情でこの一部が損壊する。すなわち、1回は、自然現象による崩れによって、埋納塚の下方側が損壊している。次の1回は、昭和48年10月安達茂幸氏が銅鏡・銅剣を発見された時掘られた穴(以下安達ピットという)によって埋納塚のほぼ

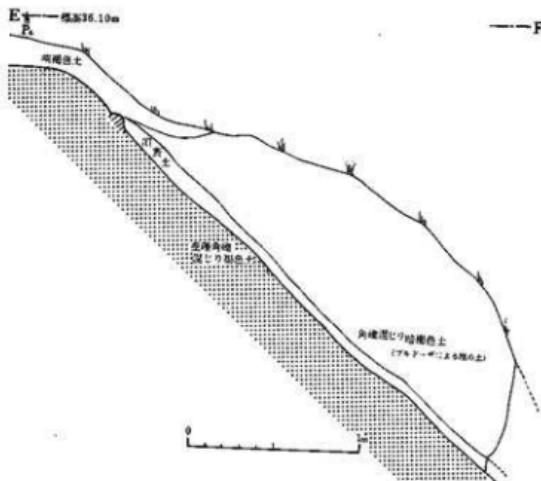


图7 调查地区EF断面图

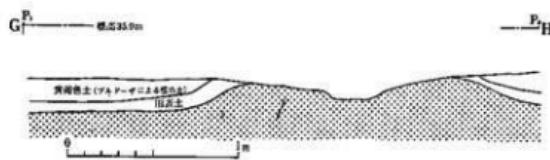


図8 調査地区G工横断面

中央部が損壊する。安達ピットはツルハシによって掘造作に掘られた不整形なものである。上方では徑約40cm、下底では徑18cmあり、埋納礎の中央部底を突きぬけてさらに新しく5cm掘りこんでいる。この安達ピットの中はぶかぶかの埋め土があり、その下には安達茂幸氏の話のとおり豚の肥料が塊状に押し込まれていた。

埋納礫は凝灰岩の角礫がちの黄褐色土を掘ってつくれられており、掘ったあとの周縁にはもともと含まれていた5~10cm大の角礫が残っている。中央近くには20cm大以上の岩塊もある。また、高い側の一部には空洞化したところもあったが、これは自然的なものである。

現存する埋納礫は、図6にみるようである。傾斜地の高い側で幅30cm、低い側で幅38cmである。縦断面ABでみると、高い側と低い側

の斜距離は66cm、高い側と低い側のレベル差は36cmを測る。横断面CDでみると、上底幅44cm、下底幅20cm、上底と下底のレベル差20cmを測る。

なお、安達ピットの影響を受けなかった部分が、低い側に幅8cmのベルト状に残っており、本来の土が埋まっていた。

埋納塙の周囲は地山面が段状に傾斜している。また、発掘前すでに自然崩壊によって損壊していた埋納塙の低い側の崖面断面は図8のようである。すなわち、起伏ある斜面のヤマの部分に掘られている。そしてちょうど埋納塙の底面以下の土は木の根が多く入りこみ周囲より密度の粗い土となっていたが、5号剣鋒部を検出した直下の面が埋納塙の底面と判断された。

以上のように埋納塙は、ただ単に急傾斜地を20~30cm掘りこんだ簡単なもので、石を組合せて囲いをするといった特別な状態は看取することができなかった。

遺物の検出状況

遺物は、今回の発掘調査によって、5号銅劍鋒部、2号銅鐸鉗、劍片などが検出されている。

銅鐸・銅劍は後述のように安達ピットが掘られたことによって破損するが、その破片の多くは、埋納塙の中央近くの石のあたりで発見されている。破片のうちで明らかなものは、2号銅鐸の鉗、2号銅劍劍身中央の刃部、3号銅劍の関節などである。それについては後述するが、この他の多数の破片は小片であってどの銅鐸あるいは銅劍のものかは不明である。また、発見された銅鐸・銅劍の欠損状況からみると破片はもっと多く発見されねばならないが、発掘区域内では検出できなかった。

つぎに、5号銅劍の鋒部は、丘陵の斜面低い側に立って埋納塙を傍観した場合、右下の安達ピットの影響を受けなかった埋め土の下において検出されている。この鋒部は鉢を埋納塙の低い側に向け、闇に近い方を高い側に向けて、鉢を地山に接して低く、闇に近い方を高くしていた。後述のA面側が上面を向いており、A面に付着した土には他の劍が接していたことを表す斜めの面をもつ土が付着していた。折れた鋒部の破断面は少し古い断面の様相を呈する。

この鋒部から20cm離れた南側の地山に接して2cm大の劍片が1片検出されている。この劍片の破断面は5号銅劍鋒部同様に少し古い断面の様相をする。

2 銅 1 号 銅 鐸

大きいほうのこの銅鐸は外縁付鉢1式四区製接縫文銅鐸である。
^{注6}
発見時、身の左下間にツルハシの打撃をうけたため大きな傷がある。この面をA面、その反対側をB面とすれば次のようである。

法量 現存重量は1820gある。身の高さ23.9cm、鉢の高さ6.8cmで現存高30.7cmを測り、復原すれば総高32.2cmである。幅は身上端のところで14.0cm、裾で20.3cmと復原される。

現存する鉢は、鉢孔高3.75cm、鉢中央幅3.2cm、紐脚幅A面左4.7cm、A面右4.55cm、厚さは紐脚部の最も厚いところで8.8mm、鉢中央最大厚さ7.0mm、菱環外斜面端の厚さ2.3mmある。

現存する身の長さは、A面左端23.7cm、中央23.75cm、右端23.6cm、B面左端23.6cm、中央23.3cm、右端23.7cmある。身の上・下端を結ぶ直線と反りの最も深い点の位置とその距離は、A面においては左上端から13.5cmのところで3mm、中央上端から12.5cmのところで4.5mm、右上端から13.5cmのところで4mm、B面においては左上端から13.0cmで3.5mm、中央上端から12.5cmのところで4mm、右上端から13.0cmのところで3.6mmある。身上端幅はA面10.6cm、B面10.7cm、身下端幅はA面17.2cm、B面17.4cmある。身下端厚さは3.0~3.8mmある。

鐘長さはA面左鐘23.3cm、右鐘22.7cmで、現存最大鐘幅は1.92cmあり、厚さは3.1~4.0mmである。鐘の反りは欠損しており計測できない。

舞の長径10.8cm、短径7.2cm、底の長径17.4cm、短径11.7cmである。

内面には、A面裏側左で3.75cm、右で3.7cm、B面裏側中央で3.85cm下端から上寄りに幅1.16~0.9cm、身を加えた厚さ8mmの突帯がある。突帯の断面は半円形状である。

鑄造・整形痕 鐘のA面側に肩下りはなく、B面側に2.5mmある。身のA面側とB面側との鋳型合せにはわずかのずれがあり、A面を手前にむけて舞を俯観すると、A面側が右に、B面側が左に2mm前後ずれている。A面下辺横帶の下寄り0.5cmのところには内面突帯に対応して凹みが横帯状にある。

型持穴についてはA面身左上のものは上端から4.1cm離れて8.5mm、左端から1.3cm離れて8mmの長方形に近い丸形の孔をあける。身右上のものは右端から1.6cm離れて7.5mm、上端から4.2cm離れて10mm

の長円形の孔をあけるが、湯回りが多く不整形となる。左裾の型持穴は左身端から2.5cm離れて8.5mmの幅で1.1cmの△形の切りこみをいれる。右裾のそれは右端から2cm離れて上幅7mm、下幅10mmで8.5mmの△形の切りこみをいれる。B面における身左上の型持穴は身の上端から4.05cm離れて8.5mm、身の左端から2.0cm離れて8.5mmの長円形の孔があく。身右上のものは、身の上端から3.9cm離れて9.5mm、身の右端から1.9cm離れて8mmの扁円形状の孔があく。身裾左の型持穴は、左身端から2.6cmのところから幅6.5mmで9mmの切りこみを、身裾右のそれは身右端から2.8cmのところから幅7mmで1.5cmの切りこみをいれる。

舞型持穴はA面側では身上端中央部から2.0cm離れて、1.3~3.2cmの穴を、B面側では身上端中央部から2.3cm離れて1.0~1.4cmの穴をあける。

鉢上り不良箇所は、A面では身左の下辺横帯鋸歯紋の左から2番目と3番目の間の小孔、裾の身厚さおよび右襟右側半分の厚さの不均一などに指摘される。B面では身右の型持穴の変形、身右下裾に近い部分、身左下下辺横帯の第一鋸歯文、身右端の上端から8.5cm下寄りのところの各小孔、身裾の中央部における厚さの不均一などにみえる。また、舞のA面側は、身上端と型持穴の間に鉢くぼみを生じ、かつ左鉢脚部で1.0~1.6cmの大きさの鉢損じがある。鉢孔が舞と接する左右部分には铸造後のヤスリによる整形痕が残る。また、A面身上端から上横帯上端を区画する線との間に铸造後の段階で面取りりする。なお、内面突唇にはいくらかの磨滅痕をみる。

銅鐸の文様 錘・身・轡の順に説明する。

錘 A面は外縁を殆んど欠失しており文様はわからない。菱環は外斜面を3帯に、内斜面を2帯にわけて左右相称の綾杉文帯とする(10図参照)。B面はA面と同様である。

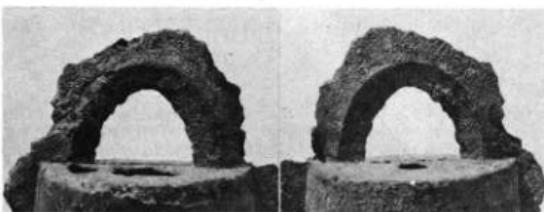


図9 1号銅鐸錘(左A面・右B面)

身 A面の四区製婆文は、上・中・下の3横帯間を左・中央・右の3縦帯でつらぬいている。上横帯の幅は2.15~2.2cm、中横帯の幅は2.2cm、下横帯の幅は2.2cmである。上横帯の上端は身の上端から4mm下がったところにひく区画線によって画される。また、下横帯の上端および下端を画する線は2線からなる。左縦帯の左端と右縦帯の右端には、それぞれの帯を区画する線をひき、身の端との間を左では上下端とも4mm、右では上端が3mm、下端が4.5mmあく。左縦帯の右区画線は2線からなる。右縦帯の左区画線は下方で2線となる以外は1線からなるが、それは中央横帯をつらぬき連続する。左縦帯の幅は2.0~2.32cm、右縦帯の幅は1.95~2.35cmある。中央縦帯は上横帯と接するところで幅2.25cm、下横帯と接するところの幅2.75cmある。製婆文の線条間隔は3~3.5mmあるが、いくらか不揃いである。線の太さは斜線も区画線もほぼ似かる。

身の下辺横帯は、直線3条の上に頂角を上に向かた上向鋸歯文帯をおき、さらにそのうえを直線2条で限り製婆文の下横帯へと続く。直線文3条を上から第1、第2、第3直線とすれば第1、第2直線間には、右上り左下りの平行斜線文横帯「L」と第2、第3直線間には左上り右下りの平行斜線文横帯「R」との2帯をあい重ねて1帯とした綾杉文帯がある。^{註7}この斜線条は細い。また、直線文3条の間隔はいくらか不揃いの平行線である。鋸歯文については、単位文の底辺を下に頂角を上においていた状態で斜線が左斜辺に平行し、右上り左下りとなる単位文を「L」斜線が右斜辺に平行し、左上り右上りとなる単位文を「R」と呼ぶと、左側7個の鋸歯文は「L」右側7個の鋸歯文は「R」をおく。すなわち、身の左右で鋸歯文帯の単位文構成が異っている。左側の「L」鋸歯文帯のうち左から数えて第2、第4番目は見えない。そしてまた、左から数えて第8・第9鋸歯文の間には「L」鋸歯文がある。

左端単位文と身の左端との間は8mm離れるが、右端のそれは身の右端と接する。

B面の四区製婆文は、A面同様3横帯間を3縦帯でつらぬく。上横帯の上端から身の中央で5.2mm、身の右端で3.5mm下がったところからひく区画線によって画される。上横帯の幅は、中央で2.6cm右端で2.3cm、中横帯の幅は2.15cm、下横帯のそれは身左端で2.2cm中央で2.3cm、右端で2.3cmある。下横帯の上下を画する線は、A面同様2線からなる。区画線はA面がほぼ製婆文と同様の太さであ



図10 1号銅鐸鉢復原模式図

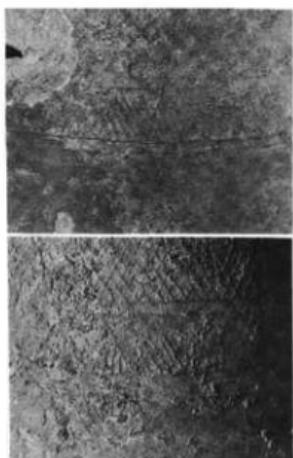


図11 錫齒文模様
(上A面・下B面)

るのに対して、B面は区画線が太く袈裟縞のそれは細い。左縦帯の左端の帶を区画する線と身の端との間は5.5mm、右縦帯のそれは3~5.5mmあく。左縦帯の右区画線、右縦帯の左区画線は、1線であってA面とは異なる。

身の下辺横帯は、直線文3条のうえに頂角を上に向けた上向き鋸歯文帯をおき、さらにそのうえを直線文2条で限り下横帯の袈裟縞へと続く。下の直線文3条にはA面にみられた綾杉文を観察できない。鋸歯文帯の鋸歯文単位文は13個あり、左から「L」単位文が6個（うち4番目は不明）次いで7番目は「R」、8番目「L」、9・10・11番目「R」、12番目「L」、13番目には「R」の単位文がある。斜線条の間隔および底辺長は不揃いである。

左端単位文と身の左端との間は7mm離れるが、右端のそれは文様を画する1線をおいて6mm離れる。

鑚 A面左鑚の鋸歯文単位文は頂角を身の内向きとする「R」、右鑚のそれは「L」であり左右対称となる。鋸歯文単位文は鑚端のほうよりも鉢に近い方が単位文の底辺を小さくする。B面の文様も同様である。

発見時の損傷 これは殆んど大部分A面に見られ、B面のそれはA面に対応するものである。

A面 鉢の外縁および鑚の外周すべてにわたって欠損し、さらにこれに伴う剥離がある。この剥離はB面にはおよんでいない。欠損面は芯部で紫銅色を呈し、両端で淡緑色を呈する。鉢は掘り出した時の応力でねじれる。身上端と脚にそって打撃と剥離があり、さらに鉢孔の頂部においても広範囲に剥離する。中央縦帯と中横帯の交叉部右上には、身の上下端方向に4cm、左右方向に0.9~1.7cmの剥離がある。

下左区画から下辺横帯にかけては、ツルハシの強打撃による裂傷が身の内側まで達し、身の左右方向に4cmにわたって口を開ける。これに伴う剥離は身の上端側が多く、下端側が少ない。下端側の剥離にはヒビ割れが生じる。標は左半分の欠損が大きく、これに伴って剥離がある。また、左鑚近くの身に発見後についた身上下方向の擦過痕がある。

B面 損傷は少ない。鉢の右半分舞に近い部分と左鑚上半に剥離があって、紫銅色を呈する。このほか、身の右半分に発見後の擦過痕と下辺横帯右端に発見時の小さな欠損孔がある。

鋪・固着物・土の付着状況 全体にわたってところどころに固着物があり、文様を不明瞭にする。

A面 鈕・身・舞の右側半分に鮮緑色の鋪が見える。これ以外の部分は暗褐色である。殊に、左下半は黒ずんでいる。そして右半分にはB面から続く固着物がある。A面身の内面は、左の内側半分より右の内側半分に多くの土と固着物が付着し黒ずんでいる。舞の外側における固着物は、左側よりも右側が多い。

B面 鈕は固着物がおおうが、固着物がはがれた部分は青緑色あるいは淡緑色を呈する。鈕中央の右寄り菱環内斜面は、緑色の鋪がつく。身の右半分と右舞は多く暗褐色を呈し、A面のそれと対応する身の左半分と左舞の全面には固着物がおおい、薄い淡緑色や緑色の鋪がある。そして、固着物の剥れたところは青緑色を呈する。内面はA面のとき観察したのと対応して、右の内側半分より左の内側半分に多くの土を混じえた固着物がある。固着物は暗褐色を呈する。

底から舞の内側を見た場合、A面左側の裏側には土を混じえた固着物が少ないが、他の部分は多くの固着物が付着する。舞の外側における固着物は右側よりも左側が多い。

2 号 銅 鐸

小さいほうのこの銅鐸は扁平鈕式四区袈裟襟文銅鐸である。

身に発見時の損傷で大きな穴のあいている側をA面、その反対側をB面とする。

法量 現存重量は613gある。現存する身の高さ16.3cm、鈕の高さ4.5cmを測り、復原すれば總高は22.3cmである。現存幅は身上端のところで7.4cm、裾で11.1cmである。

残存する鈕から鈕孔高2.0cm、鈕中央幅1.9cm、鈕脚幅3.9cmと復原され、厚さは鈕脚部で0.5cm、鈕中央で0.4cmある。

身の長さは、A面左端15.6cm、中央15.9cm、右端16.1cm、B面左端16.25cm、中央16.3cm、右端15.6cmある。身の上・下端を結ぶ直線と反りの最も深い点の位置とその距離は、A面においては左上端から7.8cmのところで3.3mm、中央上端から9.5cmで2.5mm、右上端から8.0cmで3.5mm、B面においては左上端から9.5cmで2.5mm、中央上端から9cmで1.7mm、右上端から9.5cmで2.3mmある。身上端幅はA面7.48cm、B面7.53cm、身下端幅はA面11.2cm、B面11.18cmある。身の厚さは、身上半の型持穴あたりで2.6mm、下端で3.5mmある。

鋪は身の裾端からはじまるが、鋪長さは、A面左舞15.0cm、右舞15.6cmが現存し、身上端の鋪幅は1.1cm、鋪端のそれは1.82cmある。



図12 2号銅鐸鉢模じ孔

鎧の厚さは、身に接するところで3mm、端で2.2mmある。

舞の長径7.5cm、短径4.9cm、現存する底の長径11.2cm、短径6.9cmである。

内面突帯は、B面身中央から1.65cm上寄りにあり、幅は6.9cmある。身の厚さを加えた突帯の厚さは5mmあり、断面は梯形状をなす。

铸造・整形痕 身のA面側とB面側の铸造合せには、1号銅鐸と同様にわずかのずれがあり、A面を手前にむけて舞を俯観するとA面側が右に、B面側が左に1mm前後ずれる。型持穴は身上半のA面、B面に2孔ずつと舞に2孔ある。身下端はない。A面身左上のものは上端から3.2cm、左端から1.4cm離れて円形に近い孔を開ける。A面身右上のものは上端から3.1cm、右端から1.3cm離れて穴を開ける。B面身左上のものは上端から3.1cm、左端から1.3cm離れて変形した穴を、身右上のものは上端から3.0cm、右端から1.55cm離れて著しく変形した穴を開ける。

舞の型持穴はA面側では身上端中央近くから2cm離れて径0.4~0.56cmの穴を開け、B面側では身上端から1.15cm離れて径1.0~0.6cmのコ字状の穴を開ける。

鉢上り不良箇所は、次のようである。A面の身上半左の型持穴は右下に湯回り不良の部分がある。左下鎧も湯回り不良で欠ける。さらに、A面内側の内面突帯は、湯回り不良で身中央部分が2.1cmにわたって欠ける。これに対してB面は、身上半左の型持穴付近において湯回りが悪く、図12のように穴が見られるうえに型持穴も変形して鉢上る。身上半右の型持穴は右下が湯回り不良である。さらに、右下鎧端もA面に対応して欠ける。舞はB面側の型持穴が変形して鉢上る。なおA面の身にある幅0.7~1.2cmの幾重にもある縦割りのあとは、铸造後のものである。

銅鐸の文様 1号銅鐸と同じように鈕・身・鎧の順に説明する。

鈕 A面は中央に幅0.5cmの菱環文様帶があり、それに練杉文があるほかは文様はわからない。B面はA面と同じように幅0.6cmの菱環文様帶があるが文様は表面を固着物がおおっており不明である。菱環文様帶は鉢脚部端まで連なっていない。

身 四区袈裟櫛文をもつものであるが、A面のそれは上横帯および左縦帯の一部がわずかにみえる程度である。すなわち、上端の中央あたりと身左下半に文様が一部残るだけで四区の区画線ははっきりしない。下辺横帯は三条の直線文に頂角を上向きにした「R」鋸

歯文単位文が身の左端から4個並ぶ。B面身の文様は上横帯がみえる。固着物を剥がせばさらに広範囲に文様がみえると思われる。

鱗 A面左鱗の鋸歯文単位文は頂角を身の内向きとする「L」、右鱗のそれは「R」である。身上端に近い左右の鱗には2条単位の直線文が2つある。これは鱗耳のつく型式に類似することを表わしている。一方、B面については左鱗の鋸歯文単位文はA面と同様に頂角を身の内向きとする「L」である。右鱗はA面と異なり「L」である。身上端に近い左右の鱗にはA面同様の直線文がある。

発見時の損傷 A面側に顕著で、B面側はA面側の損傷に対応するものである。

今回の発掘調査で発見された扁平鉢は、身と直接接合できるものではなく、鉢の内縁・外縁ともに一部欠損する。

身のうけた打撃は次のようにある。A面の舞上面右端に1.5cmの打撃による孔があく。同じ面の左端にも身の裏側に達する亀裂の凹みが生ずる。A面身の上半にある左右の型持穴の中間と右の型持穴の部分は大きく破損する。そして、その周囲は剥離を生じ、そのうえ亀裂をも伴っている。特に、右の型持穴の亀裂はひどく身の裾までも達する。また、身の右下端も欠損し、それに続く部分には大きな剥離を伴っている。

鱗は、A面側からの打撃をうけ外周すべてに欠損を生ずる。特に、A面右鱗の鱗端から5.7cmのところは、A面に近い方向からの強打撃がある。A面左鱗端は折損する。B面側は、身下端の右側にA面の損傷に対応する損傷がある。また、身の中央に擦過痕がある。

鱗・固着物・土の付着状況 A面は身の左半分に固着物があり、白っぽい褐色を呈する。この右半分は暗褐色をする。剥離によって表われた面は、紫銅色または淡緑色をする。身上半中央部の破損断面は、紫銅色である。身中央部にある縱に削られた部分は縦帶状に青緑色の砂粒状の鱗があり、同様の鱗は左鱗の下方にも見られる。

B面は全面固着物がおおむね多い。それは緑褐色、暗緑色、緑色等を呈する。固着物の剥離した箇所は淡緑色をする。

A面の内側は左側に固着物が多く、褐色あるいは青緑色を呈する。B面の内側は右半分に土と固着物が厚くおおいA面と対照的である。B面の内側の内面突帯から身下端にかけては緑色を呈する。舞の内側はB面側に土が多く付着する。

3 銅 剣

6口出土しており、いずれも中広形銅劍に属する。全長の長いものから順に1号銅劍、2号銅劍……6号銅劍と呼ぶことにする。また、鋒部左右の脣触具合を比較するとどちらか一方が他方より多く脣触しているので、鋒を向うにして脣触の多いほうを右側となるよう置いたときの上面をA面とし、その反対の面をB面とする。^{注8}

1号銅劍

法量・形状 全長54.0cmある。茎は長さ2.0cm、幅1.4cm、厚さ1.01mmを測り、その断面の形状は長円形である。この劍の最大幅は、茎尻から鋒のほうに13cm離れたところにあり、現存幅7.0cmある。幅5.4cmの間もとからくりこみ部にかけては、軽くふくらむ。闇の背の両側における刃部の厚さは1mm、切刃近くで1.8mmを測る。くりこみ部における現存幅は5.3cmあるが、小突起部は認められない。くりこみ部上端から鉢までの長さは、33.0cmある。くりこみ部上端から鋒の方向に15cmのところで幅3.5cmを測る。背は茎から鋒方向にいくに従って幅と厚さを減少して、鉢から8.8cmのところまで続く。鉢は鉢までのびる。鋒は、断面が扁平な菱形を呈し、幅の狭い鋭利な形状を呈する。

闇部の背両側の厚さは、切刃近くの厚さよりも薄い。そして、劍の大きさに比べて刃部の厚さは薄い。茎は鉄放しのままである。

背の中央には鉢があり、それは背の両側斜面で研ぎわけられ、切刃は鉢の傾斜と同一に研ぎあげている。鋒部の研ぎあげはA面では左側のほうを右側よりも多い。鉢は鋭い。

この劍は、闇もとからくりこみ部にかけての幅に比べて劍身が細長いという特徴があり、他の5口の劍とはやや趣きを異にしている。長さの点で鹿島県源田発見の全長54.3cmの銅劍と肩をならべる。

損傷 身下半の背両側刃部が折れる。A面を正面においた場合、闇もとから鋒方向に2.5cmのところで右側に曲がり、その反りは5.5mmある。また、側面から見ると茎尻から29cmのところでA面側に2mm反る。茎尻のところでは逆に2mmB面側に反る。

外周は剝離し、A面左の闇からくりこみ部にかけては新しい破損がある。A面劍身中ほどの右側は発見後叩いたあとがある。茎のA面右半分は剝離する。鉢はB面側に折れ曲がる。B面の損傷はA面から受けた傷に対応する。

鉢・固着物 地色の紫銅色に加えて青緑色あるいは淡緑色を呈する。鉢は左右両側とも脣触し原形を失っている。特に、A面右側は淡緑色でもとの面を残さないほどに脣触が著しい。B面の鋒および



図13 5号銅劍の折れ曲り

身の中ほどは背に剥離があり、その部分は淡緑色を呈し、A面同様原形を損う。また、腐蝕による多数の小孔は、A面の背とB面の鋒部にある。

A面左半分に淡暗褐色の鏽を混じえた土が付着し、B面の鋒右部分とくりこみ部にかけて暗褐色のものがつく。

2号銅剣

法量・形状 全長50.8cmある。茎は長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.9cmで扁円形の断面をする。茎尻面は平坦である。茎尻から2.4cmのところのB面に径3mmで深さ0.5mmの浅い小孔がある。関もとから鋒方向22cmのところで刃幅4.5cmを測る。研ぎあげは背の中央および、中央には鏽をつくり両側斜面を研ぎわける。A面鋒部における研ぎ出しは左側が右側よりも多い。従って、鏽は右寄りにつき、B面でもこれに対応する。鋒部断面は扁平な菱形を呈する。

損傷 A面を正面にした場合、関もとから鋒部方向に26cmのところで1mm左側に曲がる。側面からみた場合、関もとから鋒部方向に17cmのところでB面のほうに2.0cm曲がって折れる。折れた断面は紫銅色を主体に一部黄金色を示す。鋒部を除くと劍身背の両側刃部は破損する。A面の表面は、折れ曲りに応ずるヒビ割れが顕著に見られる。

欠損部分 のうち今回の発掘調査によって剣身中ほどの刃部破片が発見されている。これは長さ5.4cmあり、その観察によると、刃部の研ぎあげ部分は3mmあり、切刃角は25度であって銳利である。厚さは1.4mmある。

鏽・固着物 A面は黒銅色に緑色の鏽がある。そして、鋒部右側部分は淡緑色の鏽が鮮かである。これに対してB面は紫銅色の地に表面はにぶい灰緑色を呈し、A面に比べてより多くの緑褐色の固着物がある。特に、身中央部は褐色の厚い固着物がおおう。

3号銅剣

法量・形状 全長50.7cmを測る。茎は長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.9cmで、茎尻はやや丸く鏽張りがある。背断面の形状は扁円形で、鋒部の方にいくに従って幅・厚さとも減する。背の両側の刃部は平板状で、厚さは関に近いほうで1.6mm、最も薄いところで1mmあり、鋒部のほうにいくに従って徐々に厚さを増し、厚いところで2.4mmを測る。刃と背のがびて接するあたりは、わずかに弧を描くように銳く研ぎあげられる。この研ぎあげ面はA面では左のほうが右よりも多い。

今回の発掘によってA面左端の関部破片が発見されている。これ

によって関もとの幅は5.0cmと復原される。

損傷 A面を正面にすると、関もとの幅から26cmのところで左側に5mm反る。また、側面からみた場合、関もとの幅から18.5cmのところでA面側へ2mm反り、さらに茎尻でA面側へ1mm反る。身の下半部は両側とも欠損する。関もとの幅から32.5~40.5cmの間は剥離する。

鍔 A面の多くは緑色をし、鉢は紫銅色を呈する。B面は黒銅色の地に緑色の錆があり、関からくりこみ部にかけては他の部分よりも緑色錆が多い。刃部の破断面は淡白色をする。B面の背には腐蝕による小孔が多数あり、A,B両面とも腐蝕が著しい。

4号銅剣

法量・形状 全長50.5cmを測る。茎は長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.9mmあり、B面側は陽回りが悪く欠損部を生じる。欠損のため関もとの幅は不明であるが、背幅は関もとの幅から1.45cmある。鉢部にいくに従って他の剣と同様に幅、厚さを減ずる。B面には小突起部がわずかにみられ、それは茎尻から19.2cmの位置にある。鉢部断面は扁平に近い菱形で、鉢はややにぶい。全体に扁平なつくりである。

損傷 全体に刃部は欠失が多い。さらに、剥離はA面の表面全体にあり、それは刃部外周にもおよんでいる。しかし、B面には殆んどおよんでいない。A面を正面にしてみた場合、関もとの幅から28cmのところでA面側に1.5mm反る。

鍔 6口のうちでは表面の腐蝕が最も進んでいる。A面側が特に著しく淡緑色の部分が多い。また、剥離した部分は一部に地色の紫銅色を残すが、大半は塗基性の錆に犯され白緑色や緑色を呈する。このため元来あった背の錆が見えないほどである。A面の茎尻から30.5cmと37cmあたりに腐蝕による孔があく。B面は青緑色の錆がつくが、もとの面を比較的よく保っている。

なお、B面鉢部の右側には、他の銅剣鉢部が重なっていたことを示す緑色塊状の錆が弧状に連なって付着する。

5号銅剣

昭和48年発見当時は、鉢部を欠いていたが、今回の調査によってその部分が検出されたものである。^{注8}

法量・形状 全長50.4cmある。茎は長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.9cmある。復原幅5.1cmの関部はわずかなふくらみをもってその上にくりこみ部をつくる。最大幅は6.4cmと復原される。くりこみ部は長さ6.0cmで、その最小幅は4.9cmある。刃は4mm研ぎあげられている。くりこみ部以下の関の外周は軽く磨っている。小突起部は幅1mmあり、それから上鉢までは30.9cmを測る。

この銅劍は、背がやや扁平で、くりこみ部が長く刀部研ぎあげ幅がやや広いことを除くとおおむね次の6号剣と同様な形状を示す。

損傷 この剣は茎尻から17.5cmと32.5cmのところで折損し、1口が鋒部、剣身中央部、関部の3つの破片となっている。A面を正面においていた場合に、左右の反りは見られない。しかし、側面からみた場合、A面側に折れ曲る。すなわち、剣身中央部を基準にすると関部は茎尻で1.1cm A面側に反って脱く破断し、鋒部は鉈で6.1cm A面側に反り、破断箇所は湾曲して折れる（図13参照）。関部と剣身中央部の折損断面は新しく、剣身中央部と鋒部の折損断面はそれよりも古い。さらに関から剣身中ほどにかけてのA面刀部右側は、5号銅劍と同様に欠失する。

錯 A面の背から右側は腐蝕する。そして、この部分には腐蝕による小孔が多数ある。全体に青緑色を呈し、関から身中ほどまでの背は緑色で、茎の右半分は淡緑色をする。関には、2.6cmにわたって塊状の錯がつく。これに対してB面の関右側刀部と背にかけては赤銅色の部分が長さ4.5cm、幅1.3cmにわたって見られる。この赤銅色部分はあるいは付着物かもしれない。

6号銅劍

法量・形状 全長49.3cmある。茎は長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ1.1cmで、断面はやや円形に近く太い感じをうける。関もとは復原すれば幅5.2cmある。関はいくらか外にふくらむが、最大幅は茎尻から10.5cmのところにあり、その復原幅は6.6cmある。くりこみ部の長さは5.0cmで、その最小幅は4.8cmである。くりこみ部切刃の研ぎあげ幅は3mmある。小突起部から鉈までは31.1cmある。厚さ2mmの刀部を研ぎあげ4mm幅の切刃をつくるが、この研ぎあげは背におよび錯が通る。背の両側部分は、背に近い方が厚さ1.3~1.5mm、切刃側は厚さ1.8mmとなっている。背の錯は鉈までのが、鋒部の断面は扁平な菱形で、鉈は鋭い。B面の錯上りは湯回り不良で欠損部がある。

損傷 A面右側の鉈から22.4cm以下の刀部が特に著しく、損傷し欠失する。さらに、鋒部A面の右側と茎A面右半分が剥離する。またくりこみ部はA面側に4mm反り、関もとの端も欠ける。

折れ曲りは、A面を正面にした場合、S字を引き伸したようにゆるく曲がり、関から24cmのところで左に2mm反る。一方、側面から見た場合も同様な曲りがある。つまり、茎尻から13.3~30.3cmの間では27.3cmのところで1.5mm B面側へ、茎尻から39.3cmよりうえではA面側に鉈のところで4mm反る。茎のB面には損傷がない。

鏑 A面の地は紫銅色、表面は黒銅色あるいは淡青緑色をする。関あたりでは塊状の緑色を示す鏑がある。鋒右側と茎右半の削離した部分は白緑色をする。これに対してB面は、くりこみ部あたりの背のみ紫銅色をし、関部は淡緑色の鏑がおおう。

表1 銅 鏑 法 量 表

(単位cm)

No.	型式	現存復原重量	現存高	鉛			鷲			身		備考
				高	中央幅	厚	長径	短径	高	底径	長径	
1	外縁付紐 11式	1,820	32.2	30.9	復原 8.7	復原 4.6	0.9	10.8	7.223.9	17.4	11.7	外周が欠損する
2	扁平紐式	613	22.3	20.8	復原 3.9	復原 1.9	0.2	7.5	4.9	16.5	11.2	6.9 紐は欠損し一部が残る

表2 銅 剣 法 量 表

(単位cm)

No.	型式	現存重量	全長	茎			関幅	備考
				長	幅	厚		
1	中広形	513g	54.0	2.0	1.4	1.0	5.5	身下半背の両側で折れる
2	タ	476	50.8	1.8	1.5	0.9	5.0	背の両側の刃部は欠損が多い
3	タ	470	50.7	1.8	1.4	0.9	5.0	刃部多く欠損する
4	タ	413	50.5	2.1	1.4	0.9	5.5	A面は腐蝕による剥離が多い
5	タ	434	50.4	2.1	1.6	0.9	5.3	三につ折れる。またA面右側の刃部を欠損する
6	タ	509	49.3	1.8	1.6	1.1	5.5	A面右側の刃部を欠損する

IV まとめ

遺跡発見の学術的価値

今回の調査のまとめとして以下に遺跡発見の学術的価値、埋納状況の復原、埋納の場所、古浦砂丘遺跡との関連、共存出土、年代的位置、今後の問題点などについて記すこととする。

まずこれまで山陰における銅鐸発見例は、推定を含めて18個所²¹21個、銅劍は3個所7口銅戈2個所2口が知られている。このうち島根県東部の発見状況は次のようにある。銅鐸は八束郡宍道町木幡久右衛門氏所蔵の外縁付鉢1式2区横帯文銅鐸・鳥取県氣高郡鹿野町安富寛兵衛氏所蔵の伝八雲村熊野出土扁平鉢式4区袈裟幕文銅鐸、それに木山照道氏所蔵の外縁付鉢1式4区袈裟幕文銅鐸の3個がある。ただし、これらの発見された場所やその出土状況等は明らかでない。銅劍は平浜八幡宮所蔵の松江市竹矢町出土細形銅劍、横田八幡宮所蔵の仁多郡横田町出土の中広形銅劍の2口がある。銅戈は出雲大社所蔵の命主神社境内出土の中広形銅戈1口がある。これらの発見は古く、命主神社出土例を除くとその子細は不明である。

今度の志谷奥遺跡例は、島根県東部における銅鐸・銅劍の確実な出土を得たことおよび銅鐸2個、銅劍6口が共存出土という形で大量に発見されたという点において学術上特筆すべきことである。

それだけにそして、今回の発掘調査によって銅鐸・銅劍の埋納痕が確認され、頭初の発見時欠損していた2号銅鐸の鉢の一部と5号銅劍鉄部などを検出し、2号銅鐸が扁平鉢式銅鐸であること、5号銅劍の全長を知りえたことは大きな収穫であった。

埋納状況の復原

銅鐸と銅劍の埋納状況を安達茂幸氏の談話、銅鐸・銅劍の外面観察、検出した埋納痕の状況を総合して復原すると次のようにあったと考えられる（図版4参照）。

埋納は、角礫混じりの急傾斜地を20~30cm掘るというごく簡単なもので、銅鉢を出土した高知県の西の川口遺跡や邇賀遺跡調査例のような袋状の埋納痕は認められない。²²

この埋納痕の中に銅鐸2個を下に、銅劍6口をその上に納めている。これは安達茂幸氏の記憶による取上げ順と検出した埋納痕の凹みから判断されるところである。

銅鐸2個ともツルハシによって打撃破損をうけた側すなわちA面側が上面となって埋っていたと考えられる。1号銅鐸は、身左下半に大きな打撃、損壊が見られるが、その破断面の剥離傾斜面と亀裂の状況を観察すると、ツルハシは身の上側から握に向って振り下ろされたことを物語る。埋納痕が、丘陵の急傾斜地に沿って縱断方向

掘られていることを考えると2号銅鐸の鉤が下方を向いていたことを指摘できる。そして、2号銅鐸の外面に残る固着物、銘、土の付着状況は、既述したとおり、A面は右半分、B面は左半分に多く見られるので、左鍔をより高く、右鍔をより低く置くという斜位の状況であったと考えられる。

小型の2号銅鐸も同じように考えると銘と損壊の状況から鉤を上方に向けて鍔を斜位にA面の左鍔をより低く、右鍔をより高く置いたと思われる。

2個の銅鐸は、大きさのうえから入れ子になりうる規格であるが、埋納状態は入れ子でなかったといえる。

次に、6口の銅劍の埋納状況を推測する。

6口の銅劍は、いずれも鋒の片側に腐蝕による損耗があり、銘のため淡緑色を呈している。そして、発見時その腐蝕損耗側の身刃部がツルハシによって痛められているものが多いことから並列的に置かれていたと考えられる。5号銅劍は今回の発掘によって鋒部を下方に向けて検出されたが、このA面（上面）には他の銅劍鋒部が重なっていたことを如実に示す土が付着しており、銅劍同士に重なりがあったことを示している。銅劍同士が相接していたことによって、他の銅劍の緑色の銘が付着している。例えば4号銅劍と6号銅劍がいくらかずれて重なり、6号銅劍に5号銅劍が重なると推測される。

以上から、それぞれの銅劍は鋒を下に向けて、整然とは並んでいないが、重なった状態に近い状況に埋納されていたと考えられる。

なお、2号銅鐸A面側身の左側部分と5号銅劍B面側の関部の一部に同じような赤銅色の銘があるのであるいはこの部分において重なっていたかもしれない。

埋 納 の 場 所

銅鐸・銅劍の埋納場所は、小川ながら豊かな水の流れる狭隘な谷の入口近くにある小丘中腹の比高12.5mにある。東に面する急傾斜地であって普段足が容易に近づけない場所である。そして、集落からは少し離れた幽しい場所である。このような発見状況は他の銅鐸発見状況の例と共通しているのみならず高知県における銅鐸の発見状況とも一致している。^{注13}

埋納場のそばに大岩が2個積重なっていたという安達茂幸氏の話が事実とすれば、この大岩が道路工事当時は埋れて目立たなかったとはいえ、広島県福田木ノ宗山、大峯山、兵庫県氣比、鳥取県大社

町命主神社の各例と相似た発見状況で、岩は何かの標石となり、そのそばに埋納されたものと想像される。ちなみに『出雲國風土記』の櫛縫郡神名攝山に石神の存在が記録されているのは示唆を与える一助となろう。^{注15}

古浦砂丘遺跡との関連

ところで、志谷奥に銅鐸・銅劍を埋納した人たちの舞台となった主な集落はどこであろうか。このあたりで現在、弥生遺跡として知られるのは、前述のように古浦砂丘遺跡と佐太前遺跡である。古浦砂丘遺跡は志谷奥遺跡から2km程離れており、佐太前遺跡のそれは、2.8km離れている。距離的に短時間で結ばれるのは古浦砂丘遺跡である。

この遺跡は、弥生時代の埋葬遺跡としての実態が明らかとなっており、日本海に面する遺跡としては、この地方で最大規模のものであろう。そして、この遺跡をつくった人たちの集落はおそらく交通の要衝をもなしたところであって島根半島中央部地域を治めた中心的存在と憶測される。古浦砂丘遺跡で発見された弥生時代前期の数世代の系譜をたどると推測される呪師の存在は、後になって銅鐸・銅劍という祭器を使用する時代にも連係するものと考えられ、志谷奥遺跡と古浦砂丘遺跡との関係が浅からざるものであったといえる

ただ、弥生遺跡として判明しているのは前述の2遺跡であるが、佐陀川沿いの低湿地縁辺地帯にはさらにいくつかの弥生時代前期からの集落があったと推定され、日本海および佐太水海の海岸と農耕を基盤に生活していた人たちのいたことは想像に難くない。

なお、ついでながら、このあたりには古墳時代前期の古墳は知られず、後期の白烟古墳、やまと古墳群、峰谷寺横穴群などといった小規模の古墳や横穴しか分布しておらず、このあたりの弥生時代集落がそのまま發展して古墳時代にも大きな勢力をもち続けるとは認めにくい。この状況は銅戈を発見した大社町命主神社の周辺地域においても目立った古墳時代遺跡がないこととも符合し興味ある事実といえよう。

共存出土

今までに銅鐸と銅劍が共存して出土した例は、広島県福田木ノ宗山、香川県羽方西ノ谷、小豆島安田、徳島県矢野源田の4例があり、志谷奥遺跡例を加えると5例となる。また、銅鐸と銅戈が共存出土した例は兵庫県桜ヶ丘、和歌山県有田市箕島、広島県福田木ノ宗山の3例を挙げることができる。このように銅鐸と銅劍・銅戈が共存

して発見されることは、これらの用途が類似していたことを示すものである。

銅劍あるいは銅鐸と銅戈が共存して発見された出土地は、さきにあげたように瀬戸内から紀淡海縫岸にかけてと山陰に分布している。従って、この地域は同じ祭祀をする地域であったことを暗示するものである。そして、この地域は中広形銅劍出土地の分布地域と重なりがあると考えられる。

志谷奥例は、銅鐸と銅劍が共存して出土したことに加えて銅鐸2個、中広形銅劍6口という大量出土も注目すべき事実である。銅鐸が2個共存して発見された例は、県内の浜田市上府、石見町中野の各発見例をはじめとして全国で30例を超える。多量に発見された著例は滋賀県小篠原の24個、神戸市桜ヶ丘の14個である。銅劍の6口発見は、淡路島古津路の13口、香川県瓦谷の7口につぐ多数の発見例である。

これら祭器の大量埋納はいくつかの集落の統合を意味するともいわれる。^{庄16}しかし、それを首肯したうえで前述の小篠原や桜ヶ丘のような例を除けば志谷奥遺跡例の発見量は、ちょうど現在この地域に残る佐陀神能のように5~6人の舞手が剣をふりかざして舞うごとく、祭祀にあたって一つの地域的なまとまりのなかにある各集落から選ばれた舞手が用いた一つのセット的関係であったと憶測することも全く否定的とも思われない。そして今、佐太神社でおこなわれるお忌み祭りでは、祭りのあと神を集落から離れた山丘上まで送るが、同様に考えて銅鐸・銅劍を使う祭りのあとでは神とともに祭器を送って大地に埋めたのではなかろうかとも憶測される。

年代的位置

志谷奥遺跡発見の銅鐸・銅劍の年代的位置づけは、製作、使用、埋納の3時点を考えねばならないが、それはおよそ次のように考えられる。

1号銅鐸は、外縁付鉢1式四区袈裟縄文銅鐸、2号銅鐸は扁平鉢式四区袈裟縄文銅鐸であって、製作された銅鐸の中では、その変遷を最古、古、中、新の各段階に区分するうち古および中段階に属するものである。2個の銅鐸の型式差は、製作時期の若干の相違と認められ、共存して出土したことは伝世をした結果と考えられる。

銅鐸の製作開始年代をめぐって、その開始を弥生時代中期初頭の櫛描流水文と外縁付鉢1式流水文銅鐸との関係から前期にさかのぼりうるとする考え方^{庄17}と朝鮮小銅鐸が銅鐸の祖形であるということから

^{註18} 中期以降とする考え方などがある。ここでは、一応前者の立場をとるとすれば、志谷奥遺跡発見の銅鐸の製作は弥生時代中期ごろと考えられる。このなかにあって1号銅鐸が古く、2号銅鐸がそれより新しい。

なお、今のところ鳥取県西部、島根県東部における銅鐸の出土例は古ないし中段階鐸のみであることは興味ある事実といえる。また、志谷奥例と同様鐸は今のところ知られていない。

6口の銅劍は、いずれも中広形銅劍に属しているが、細形、中細、中広、広形などとどる銅劍の変遷過程の中にあっては、やや新しい時期に作られたものということができる。そして、中広形銅劍が扁平鉢式銅鐸と共に伴して発見されていることからこれらは製作時期を同じくすると考えられている。

中広形銅劍で長さが50cm前後あるものは、志谷奥遺跡発見例のはかに県内では、広島県境の仁多郡横田八幡宮所蔵の50.9cmの例、県外では香川県瓦谷出土^{註19} 3号劍の50.3cmの例、高知県波介出土^{註20} 1号劍の50.5cmの例が知られる。形状に違いがあるが、長さという点では徳島県源田出土^{註21} の54.3cmの例もある。

これらよりも短い40cm前後のものは、県内では、隱岐島海士町竹田遺跡の例、県外では、鳥取県田舎イヅチ頭、広島県大峯山、淡路島古津路、大分県浜の例など^{註22} 8例が知られている。

以上のような中広形銅劍出土地の分布は先に述べたように、ある一定の地域に限られ、文化的に特色ある地域相を示すと思われる。

しかし、中広形銅劍について製作される広形銅劍が瀬戸内地域に多数発見されているにもかかわらず、山陰でそれが発見されていないことは、山陰が広形銅劍を用いる祭祀をする地域に入らなかったことを暗示するものといえる。この状況を弥生式土器を通して見た場合、中期末から後期前半にかけて凹線文が盛行し、山陽地域との共通性が強く認められるが、後期後半以降は、山陽地域の土器と様相に相違があり、この地域における銅鐸・銅劍共存型祭祀の時期を考えるのに示唆を与えるものである。

志谷奥に銅鐸・銅劍が埋納された時期は、今ここで明らかにすることはできないが、隱岐島の竹田遺跡で発見された間に2孔のある中広形銅劍が、九重式土器（弥生時代後期末）を伴う溝から出土していることは、参考となるであろう。

今後の問題点

以上、一応今回の調査で知り得た概要を記したが、今後に残され

た問題点をいくつか指摘しておきたい。

発見された銅鐸・銅劍そのものについて(1)銅鐸・銅劍の図着物の成分分析 (2)金属材料の分析 (3)埋納壙内の土壤分析 (4)鏡の付着や発見時の損傷からの埋納状況の詳細な復原などをする必要がある。

また、埋納壙を検出した近隣地をプロトン磁力計や地雷探知機などによって探査をすることも残された問題である。

このほか、他地域の発見例との検討による志谷奥遺跡例の詳細な年代的位置づけ、青銅器の流入経路、集落（例えば古浦砂丘遺跡）と祭祀の関連追求などもある。

ともかく、志谷奥で銅鐸・銅劍が発見されたことは、この事実を媒介としてこの地方の弥生文化を新たな観点から究明する大きな学術的資料を得たこととなり、その意義は誠に大きいものがあるといえよう。

注1 加藤義成『校注出雲國風土記』昭・40では秋鹿郡の神名火山に比定されている。

注2 山本清『西山陵の郷文化』(『山陰文化研究所紀要』第1号昭・36)

注3 金閻丈夫『島根県八束郡古墳遺跡』(『日本考古学年報』16昭・37)

注4 金閻丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の彌生」(『人類学雑誌』第69巻3・4号昭・37)、金閻丈夫『発掘から推測する』(昭・50)

注5 山本清『県下の弥生式遺跡』(『新修島根県史』通史篇1昭・43)

注6 佐原真「銅鐸の鉄造」(『世界考古学大系』日本II昭・35)の分類による。

注7 佐原真・町田章「和歌山市有本出土銅鐸」(『和歌山県文化財学術調査報告』第3冊昭・43)の表現法を用いた。

注8 佐原真・近藤吉一「青銅器の分布」(『大陸文化と青銅器』昭・49)

注9 かつて「島根県志谷奥出土の銅鐸・銅劍」(『日本考古学年報27』)では6号銅劍として扱ったものである。

注10 橋口隆康編『大陸文化と青銅器』昭・49

注11 近藤正「島根県下の青銅器について」(『島根県文化財調査報告書』第2集昭・41)

注12 関本健児「埋納穴を有せる銅鐸形祭器」(『どるめん』7号昭・50)

注13 尾12に同じ

注14 谷井済一「安芸國高宮郡福田発見の銅鐸・銅劍」(『考古学雑誌』3-10大・2)木下忠「尾道市大峰山出土銅鐸銅劍について」(『広島考古研究2』昭・35)

注15 加藤義成「神名種山の民俗信仰」(『伝承』9号昭・37)

注16 小林行靖「女王國の出現」昭・42

注17 田中穂「まつりからまつごとへ」(『古代の日本』5号昭45)

注18 高倉洋彰「銅鐸製作開始年代の問題点」(『九州考古学』48昭・48このほか三木文雄「銅鐸について一特に時代のよりどころについての試論』(『日本歴史』228号昭・40)の見解がある

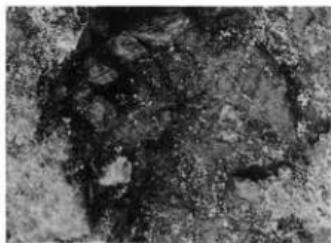
注19 高橋健白「銅鐸銅劍の研究」大・14

注20 三木文雄・岡本健児「高知県波介遺跡」(『日本農耕文化の生成』昭・36)

注21 尾10に同じ

注22 山本清「山陰地方」(『新版考古学講座』4昭・44)

注23 銅劍発見後の昭和45年乙益重隆、上野佳也、近藤正、勝部昭らの発掘調査が行われている。



V 埋納壙の保存化学処理

発掘調査によって、銅鐸・銅劍を埋納した土壙が検出されたことは、画期的成果ともいべきことであった。しかし、現場の急な崖面において現状保存することは困難な状況にあったため、土地所有者・鹿島町教育委員会

- ① 県教育委員会、奈良国立文化財研究所の4者が協議した結果、公開収蔵施設のある県がこの埋納壙を化学処理のうえ切り取って保存し、広く一般の活用に資することになった。

以下にその保存化学処理の工程記録を載せる。

工 程

- ② ①埋納壙の取り上げ範囲は、奥行120cm、幅90cm、高さ80cmと決める。

③取り上げ部分に合成樹脂を浸ませて硬化するため、あらかじめ遺構を十分に乾燥する。

- ④埋納壙は草木の根が多く含まれ、土質も脆いのでアクリル樹脂（パラロイドB-72）を散布、浸透させ、遺構全体を硬化する。

- ⑤埋納壙を取り上げ、移転させる時に崩れないように表面の凹凸に沿って、F・R・P（ガラス繊維をエポキシ樹脂で張り合せた強化プラスチックス）で補強する。このとき、F・R・Pと埋納壙表面が付着しないように和紙を湿らせて張りつけておく。F・R・Pはあとで取りはずしが容易なように、10~20cm間隔の不連続体にしておく。

- ⑥埋納壙表面の凹凸が激しくて崩れやすい部分については、ペースト状のS V426（微細なガラス玉とエポキシ樹脂で粘り合せたもの）を埋めてできるだけ平滑にしてから、F・R・Pを張る。



⑥F・R・Pを張りめぐらした取り上げ部分をさらに補強するために硬質の発泡性ウレタン系樹脂をかけて、厚さ約10cmの層を作る。これには、従来石膏などが利用されたが重くなるので、ウレタン系樹脂を転用した。重量は石膏の10分の1以下で済み、作業能率が良く、その削除も容易である。

⑦

⑦取り上げ部分の底部を切り込み、ウレタン系樹脂で包み込んだ埋納壙の天地を逆転する。この時点で屋内へ搬入することが可能となる。



⑧

⑧埋納壙底部の不要な土を削り落し、整形する。このとき、崩れ易い土質であるのでアクリル樹脂で硬化しながら削除する。



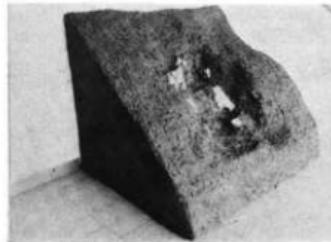
⑨

⑨可能な限りに多くの土を削り落し、取り上げた埋納壙の厚みを薄くする。F・R・Pで補強したあと、さらに針金を用いて枠組みをし、SV-426で押さえ止めし、強化、整形する。



⑩

⑩裏打ち、整形が終了したら、埋納壙の天地を正し、④～⑩で施したF・R・P、ウレタン系樹脂などの補強材を除去する。



⑪

⑪露出した埋納壙の表面部分を十分に乾燥・クリーニングし、再度アクリル樹脂で硬化して仕上げる。埋納壙を勾配を再現し、台に固定すれば展示が可能となる。

⑫保存化学処理関係者

- ・指導 奈良国立文化財研究所（浜田正昭技官、秋山謙保技官）
- ・実施主体者 島根県教育委員会
- ・協力 安達茂幸 鹿島町教育委員会 八雲立つ風土記の丘



遠景（北東から）



近景（南東から）

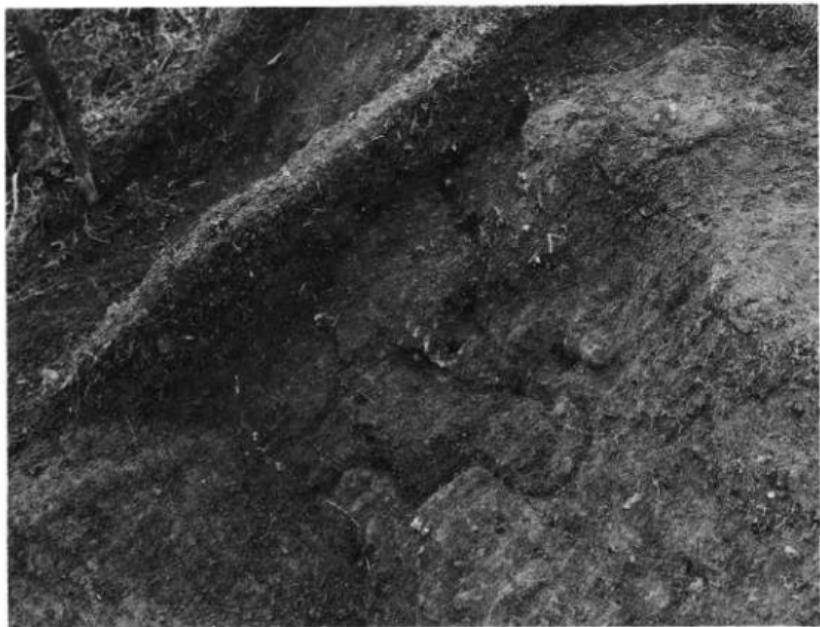


調査前の状況
(東北から)



調査地区の設定
(東北から)

図版 3 遺構(1)



埋納場の埋め土状況（北東から）



埋納場の検出（北東から）



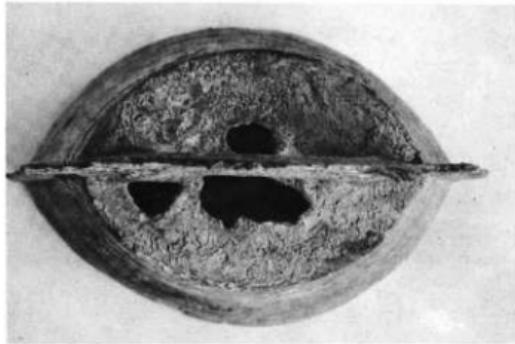
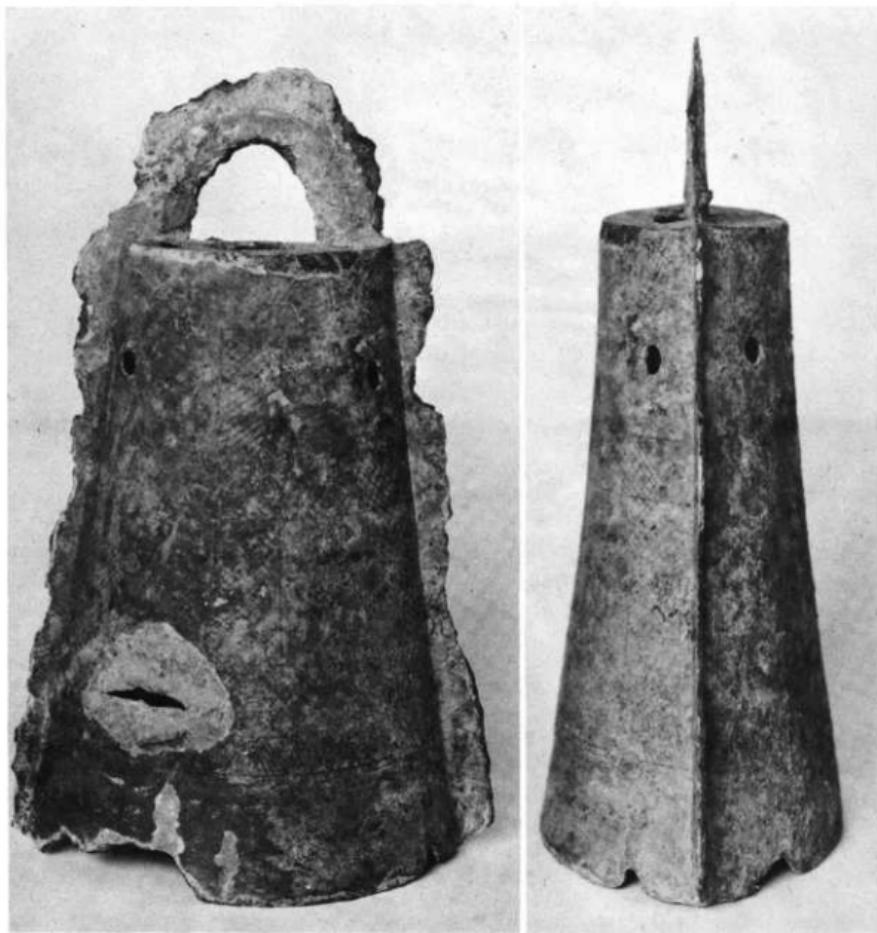
埋納擴と5号銅劍鋒部の検出（北東から）



埋納桿と 5号銅剣鋒部の検出（東北から）

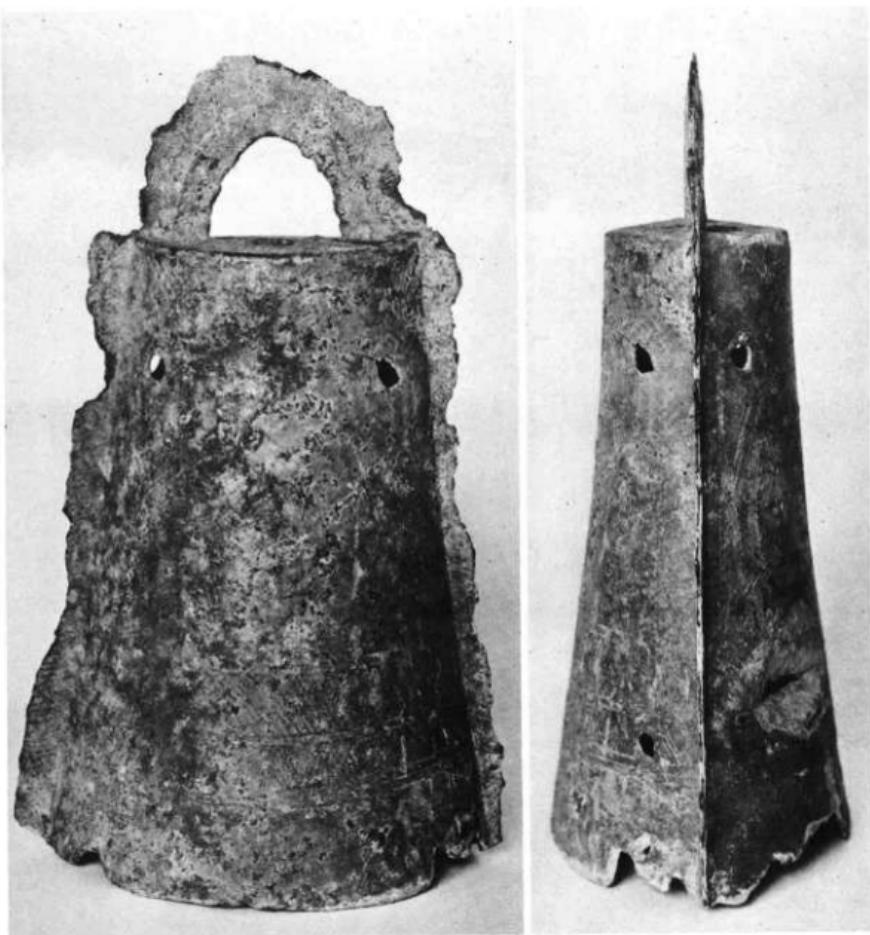


銅剣・銅剣の出土状況復原（鋒部は検出のまゝ）
(東南から)



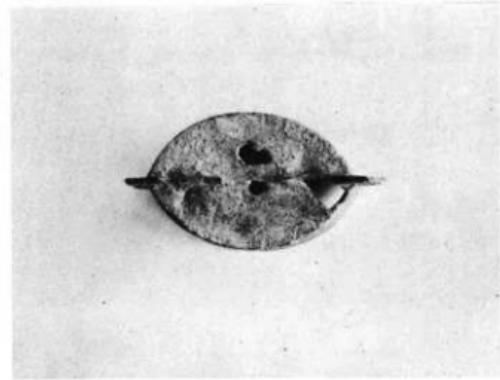
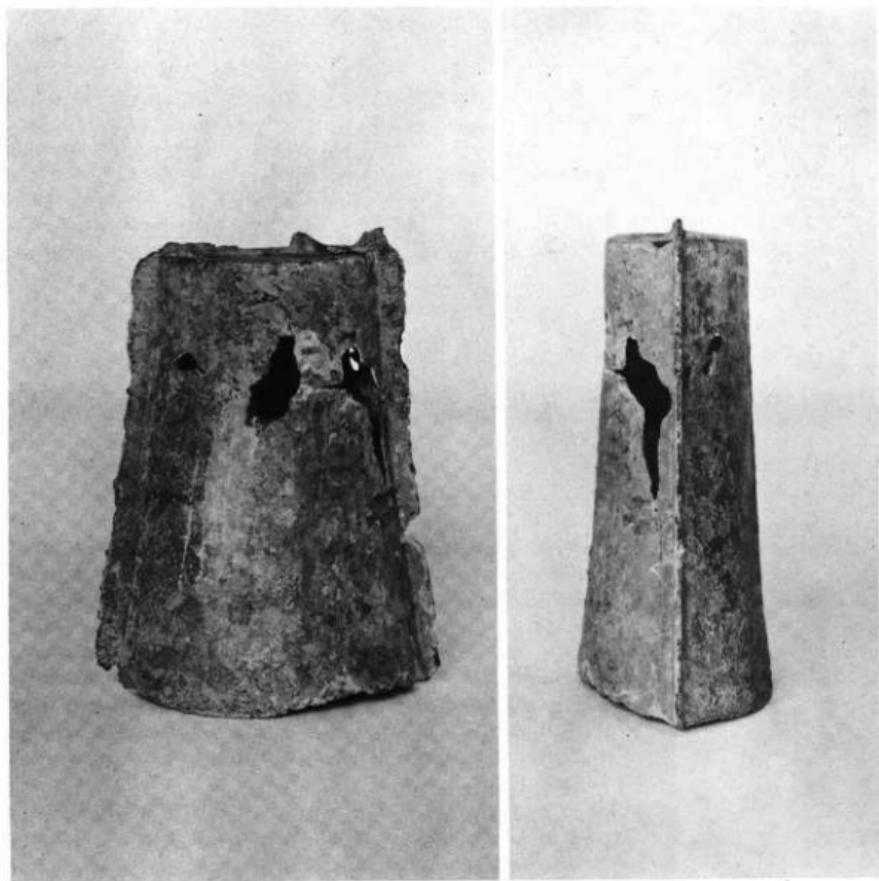
1号銅鐸 A面





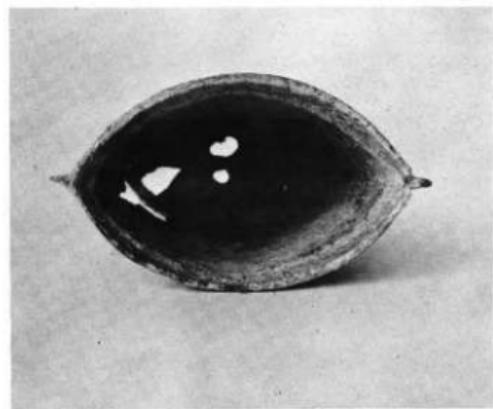
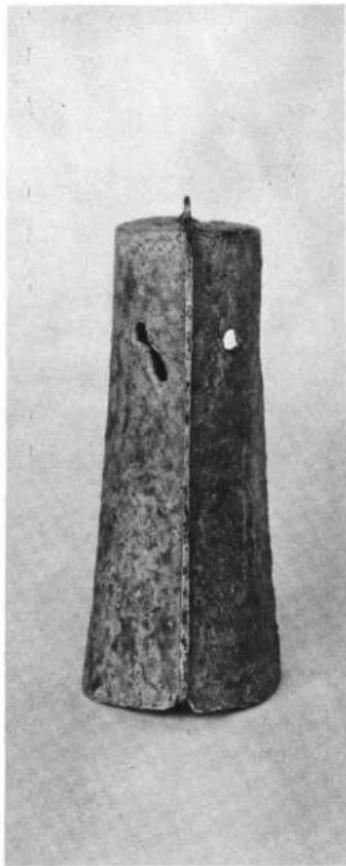
1号銅鐸 B面





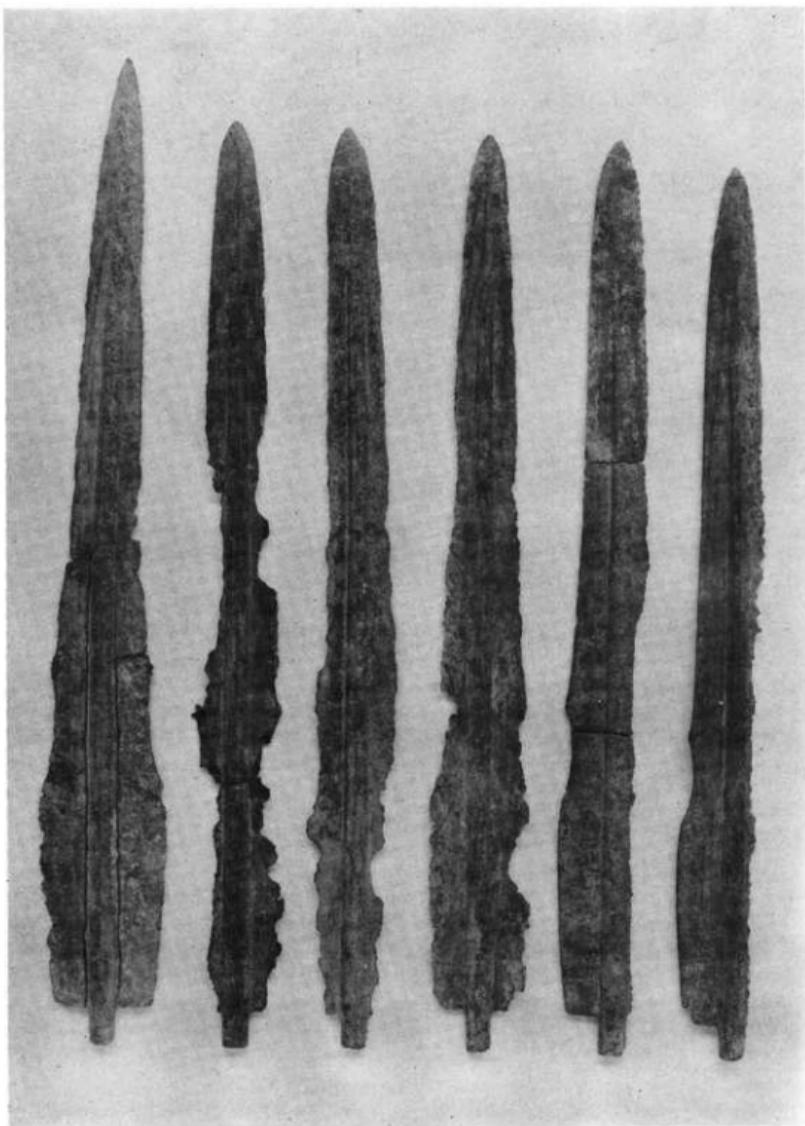
2号銅鐸 A面





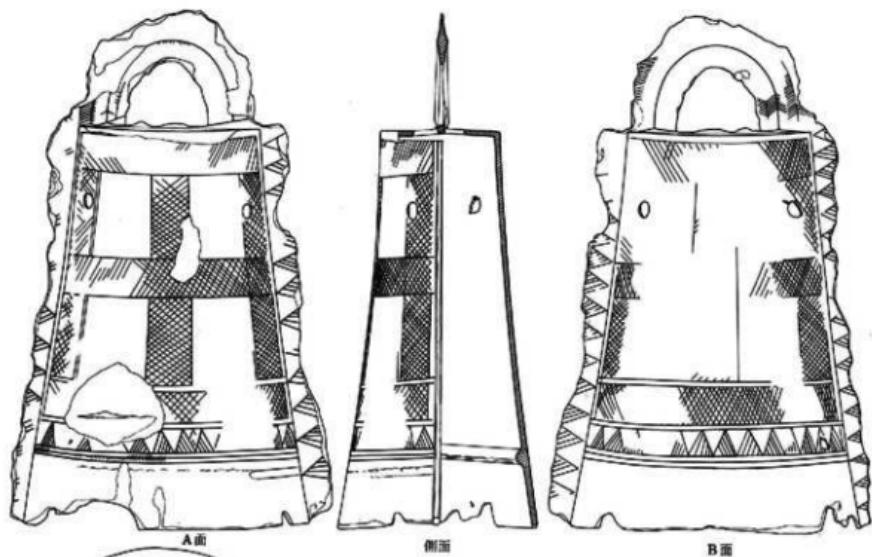
2号銅鐘 B面



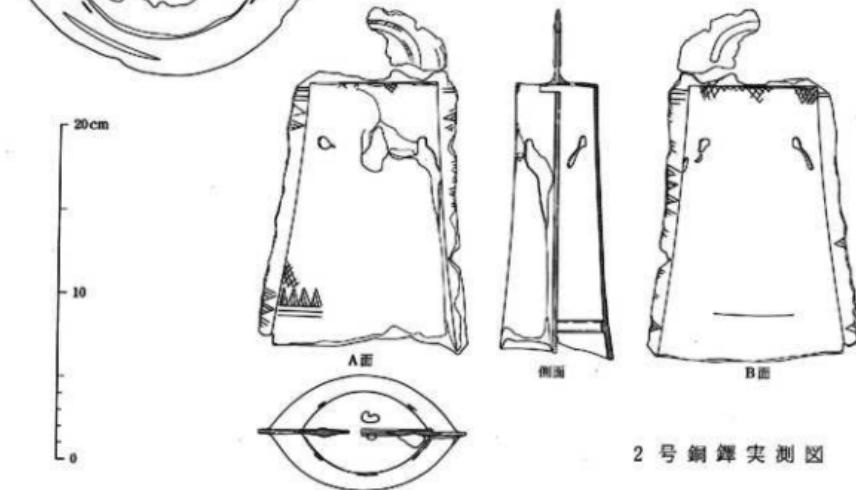


銅 剣 A 面

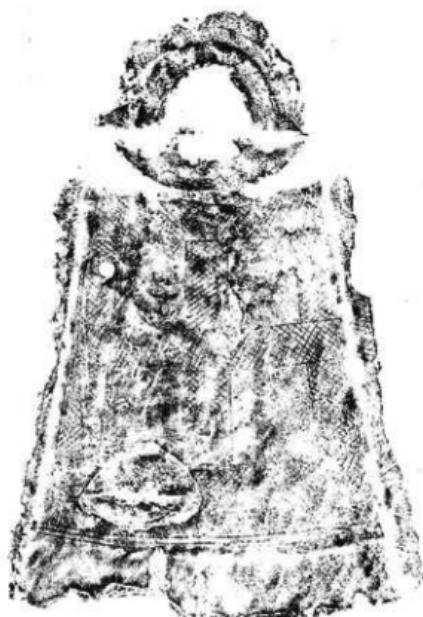
六号銅劍
五号銅劍
四号銅劍
三号銅劍
二号銅劍
一号銅劍



1号銅鐸実測図



2号銅鐸実測図



A面

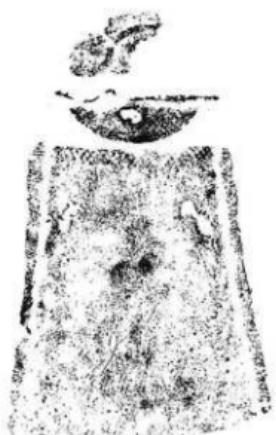


B面

1号銅鐸

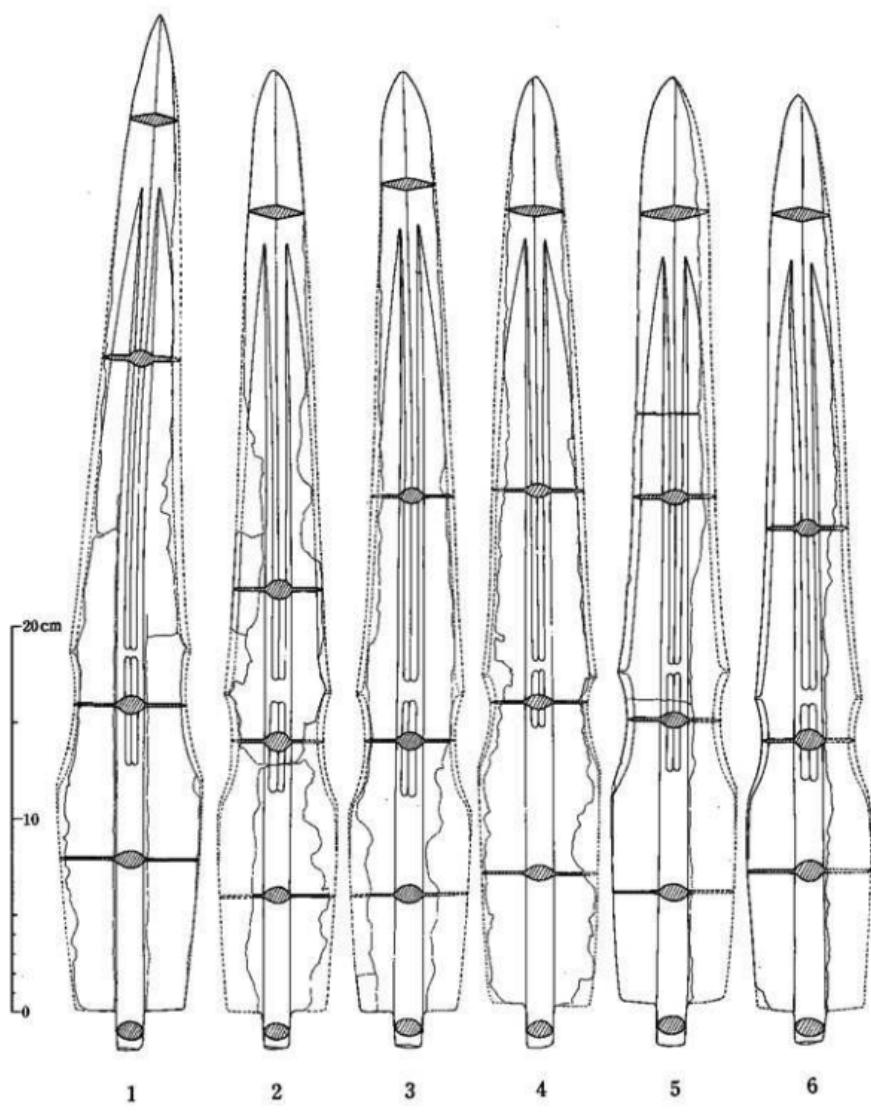


A面



B面

2号銅鐸



志 谷 奥 遺 蹤 一編譜・銅劍出土地一

昭和 51 年 3 月 発行

発行者 鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町

印刷所 株式会社報光社
平田市平田町